

台湾在住がこの3月末で16年になる  
と言つと、多くの人は驚かれるが、本人  
はそうした意識が非常に希薄になつて  
いる。日本や中国との間を行き来して  
いる間に、こころの中の国境線がとり  
払われて、「東アジア」の住民ともい  
べき自覚が立ちあがってきたのかもし  
れない。

無論、台湾自体の変容もすさまじい。  
いまの台北なら、日本女性がトランク

のである。

そして一方、台湾の文化や歴史の探  
訪に訪れる若者も増えている。いまま  
で韓国や沖縄、あるいは中国に集中し  
ていたスタディツアーの行き先が、台  
湾にもようやく向き始めたのだから  
か。

3月末にも、東京の学生諸君20名に  
お供して霧社や花蓮を回った。中部山  
中の霧社は日本の統治時代に最大規模

争に日本兵として出征された方や遺族  
のお宅を分散して訪問し、半世紀前の  
物語を聞かせていただいた。

健康な男児がごとごとく南洋に送ら  
れ、その半数は生還しなかったとい  
う戦時下の生活、村ごと強制移住させら  
れた過去、日本人移民村との交流、港や  
鉄道の建設に動員されたお話など、熱  
心にメモを取りつつ、なかには涙ぐむ  
学生もいた。

## 第十一回 歴史を取り戻す営み

——柳本通彦

ひとつ下げてやってきて、その日か  
らごくぶつうの暮しを営むのにさした  
る支障はなからう。

台湾へやってくる日本人も様変わり  
した。かつては中年の方のツアーや会  
社の慰安旅行が主流だったが、最近ほ  
めつきり若い女性の個人旅行が増え  
て、その中味も、グルメ、夜市巡りのほ  
かに、茶艺、足裏マッサージ、エステ、変  
身写真が必須コースという変貌ぶりな

の抗日蜂起が発生したところである。  
直接的な体験者の多くはすでに亡く  
なっており、関係者の墓参りをしたり、  
遺族をお訪ねするほかはないのだが、  
学生たちはそうした方々の話に耳を傾  
け、犠牲となった人びとの霊前に花を  
手向けた。

それから標高3200メートルの峠  
を越えて、東部の花蓮県に入った。県内  
にある先住民アミの村では、太平洋戦

しかし学生たちの感想でもっとも多  
かったのは、どうしてみなさんが、これ  
ほどまでに自分たちに親愛の情を寄せ  
てくれるのかということだった。それ  
は親切、親日といったカテゴリーでは  
括られない真情であり、訪れる人はみ  
な、字面で学んだ事実との落差にとま  
どつのである。

「歴史」を学ぶということとはそんな逆  
説から始まるのかも知れない。なにゆ

え、かくも優しいき民と日本は悲しい過  
去を共有するにいたつたのか。軍人軍  
属、あるいは慰安婦として動員された  
ひとびとのせつなさがいつそうに生々  
しくわれわれに過去の重みを問うてく  
る。そうした点で、台湾はまさに海に浮  
かぶ「歴史の教科書」である。

海を隔てたすぐお隣の「島」のことす  
ら、なかなかその真相は知り得ないも  
のである。同じ「東アジア」という地域  
に暮す住民として、歴史を取り戻す営  
みがようやく始まったように思える  
が、残念なことに語り部たちはすでに  
八十の坂を歩いている。



台湾花蓮壽村を訪れた明治学院大学の学生たち。